

なぜ個人的自己は歴史的主体ではないのか——後期西田における「主体」の概念

**Why the Personal Self Is Not the Historical Shutai: Nishida's Concept of "Shutai" in the Latter Period**

森 レイ (京都大学)

**要旨**

本発表が起点とするのは、「私は我々の自己を歴史的主体として考えることはできない。」(X, p. 75)、「個人的自己が歴史的主体とは云われぬ。」(X, p. 384) という、後期の西田幾多郎に見られる奇妙な記述である。こうした記述はときに、西田が個人の主体性を軽視したものであるとして解釈され批判されている。だが、個人的自己を「創造的世界の創造的要素」と捉える西田の哲学をそのように言いまとめることはできるだろうか。そもそも西田がここで用いる「主体」をいわゆる「個人の主体性」と同一視してよいだろうか。

本発表は二〇二一年度西田哲学会で行った研究発表「西田幾多郎における「主体」の概念」を引き継いだものである。前回の発表では後期西田の「主体」は、従来考えられているように「個人／個物」のコノテーションをもったものではなく、むしろ「種」のコノテーションをもったものであることを明らかにした。西田の用いる「主体」はいわゆる「個人の主体性」とは同一視できない独特な内容をもっているのである。

しかし前回発表では、そのような西田における「主体」概念の特徴を抜き出すことに終始し、なぜ西田において、個人的自己は「主体」と区別されねばならなかったかについては踏み込むことができなかった。本発表は後期西田における「主体」概念がいかなるものかを明らかにするとともに、なぜ西田が自己と「主体」をあくまで区別しようとしたかを明らかにする。

西田は自己は「主体」ではないと言うことで自己の主体性を否定しようとしたのではなかった。むしろ「主体」に回収されない自己の創造性を見ようとして、自己は「主体」ではないと言ったのである。西田は自己は単に「主体」ではないと言うことによって、連続的、過程的、そして目的論的なものに回収されない自己の創造性、自由を見ようとしたのである。

(西田のテキストの引用は旧版全集より行った。)